

東北大農 西原 熙久
佐々木嘉彦

家政学は家庭生活の向上という実践的課題を自ら担ってきた。この課題に応えるために家政学にとってまず必要なことは、家庭生活の体質改善という問題意識を強くもって實在の家庭生活にたち向うことである。

したがって、家政学の基本的な学問的課題は家庭生活全体の構造的解析となろう。家庭生活の内的諸要素ないし諸側面は必然的な相互的連関をなしてつながりあっている。分析的にみれば、生活主体間のつながり、生活主体と生活手段との、生活手段間のつながり、またそれら全体の連関である。そしてこれらの諸関係は、外的諸条件と有機的連関をなしてつながっている。また、實在の家庭生活は過程であって、上に述べた諸関係は不斷に変化発展する。その動因は、家庭生活に内在する矛盾、家庭生活と外的諸条件との間の矛盾である。このような諸関係と発展、脈絡ある連続が家庭生活の全体であって、既にふれたように、それは合法則的であるといえよう。

家庭生活の構造的解析、即ち家庭生活の理論は、家政学の独自性を主張すべき基礎理論となり、また家政学の諸知識を関係づける基礎を与え、家政学者が久しく待望した家政学の体系化をはかることができよう。のみならず、この理論は家政学の諸知識を実生活に適用する方法を与え、あるいは生活諸政策の基礎となり、家政学ははじめて自らの実践的課題に応え得るのみでなく、社会的に重要な機能を果すことができるのである。